

# 400年超の歴史を宿す大崎の鎮守、居木神社が伝える“温故知新”

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと 大崎」のDNA(原風景)を訪ねる『大崎今昔物語』。

その第十六話は、地元大崎の守護神、居木神社が守り続ける郷土の伝統と儀式。そして、時代の変遷の中でも変わることのない人々の人生行事。

地域の守り神として大崎のすべての氏子の安寧を祈り、その暮らしに寄り添う居木神社の日々がここにありました。



かつて目黒川畔、居木橋(右赤印)付近に鎮座。その後、川の氾濫を避け現在地(左赤印)に遷座した居木神社



夏越大祓(茅の輪くぐり) 稲荷・厳島神社例大祭(春祭り) 居木神社例大祭での和太鼓演奏 壮麗な例大祭神事



最近では霊験あらたかなパワースポットとして人気を集める全国各地の神社と同様、居木神社の佇まいにも崇高な神の守護力が感じられそうです。境内には、品川区指定有形文化財の厳島神社や「しながわ百景」の一つ、溶岩石の富士塚など、見どころがいっぱい。



観智と武勇の神・日本武尊(やまとたけるのみこと)を主祭神に、商売繁盛の神・大國主命(おおくにぬしのみこと)やた9柱に及ぶご祭神を祀る居木神社。大崎駅西口から徒歩4分程でつながる参道を辿れば、静謐な緑の社に建つ壮麗な鳥居が参拝者を静かに迎えています。



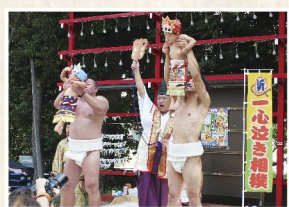
かつて地域の人々が集い、祝う場でもあった神社での結婚式。今またその価値が見直され、若い世代を中心に多くのカップルがここで結ばれています。写真は、雅楽の生演奏をアレンジした居木神社オリジナル「参進」の儀式。



遡ること400年以上も前、武蔵国荏原郡居木橋村(現在の山手通り居木橋付近)にて創建されたと伝えられる居木神社。江戸時代初期、目黒川の氾濫を避け、村内の四社を合祀して現在地に遷座、その後さらに三社を合祀して今に至る、郷土の崇敬著しいこの歴史の神社をご紹介します。大崎の社の昔と今を訪ねます。

歴史を辿れば見えてくる、居木神社の豊かな由緒。江戸の昔、居木橋付近の地から現在地に遷座した際、村内にあった「貴船明神」「春日明神」「子権現」「稲荷明神」の四社を合祀、「五社明神」とも呼ばれた居木神社。郷土の豊かな美りを背景に祭事も盛んに行われ、秋の大祭には他村からの参拝で大いに賑わったと伝えられています。明治5年になって社号を「居木神社」と改め、後に村内鎮座の「稲荷神社」「川上神社」「本郷神社」の三社を合祀。その後、昭和8年には氏子の崇敬により社殿を改築したものの、大戦の戦火により炎上の災難にまみれます。現在の姿は昭和53年に再建されたもので、長い歴史に磨かれて建つ荘厳優美なその偉容は、今も変わることなく多くの人々の崇敬を集めています。

壮麗多彩な季節の神事。さらに、人々の暮らしに寄り添う「リフレッシュ行事」にも注目。尊い日本の伝統行事や郷土の催しを今に伝える役目を担う居木神社のその取り組みは、季節の節目を彩る神事を中心にまさに多彩。正月の歳旦祭、元始祭に始まり、春祭りや納涼祭(盆踊り)、さらに荘厳な例大祭から年越しの祓いに至るまで、その数十種以上にも及びます。季節の風物詩とも言えるこの豊かな恒例行事に加え、さらに見逃せないのが、新しいかたちで行われる個人的な人生行事。今、地域や親族とのつながりを深める行事としてその価値が見直されている神前結婚式や、厄除けの祈禱、さらに



ことしの9月18日(日)に行われる「一心泣き相撲」は、赤ちゃんが運しく泣くことで健やかに育つことを祈願する。今注目の行事(詳しくは居木神社のwebへ)

家族の成長の尊い思い出をつくる「一心泣き相撲」など、忘れかけていた日本人独自の「人生の通過儀礼」を、居木神社なりの新しい所作を通じて執り行っています。



外国人日本文化体験の催しも

新しい時代のライフスタイルへ、日本古来の伝統価値を「神道に根ざした古き良き日本の文化と儀式を海外の人々にも知ってもらいたい」と話す居木神社宮司・森田義巳さん(写真左)。日本を訪れる観光客へ、神社が蓄積した豊かな「和のコンテンツ」でもてなすを、と前頁(3P)で紹介した日本文化体験を提案したご本人です。「古き良きものこそ新しい」という考えに沿った、新しい時代の神社のあり方を提示。厳肅な神前結婚式にも、儀礼の正しい解釈に基づいた魅力あるアレンジを実現しています。「変えていいところと変えてはいけないところの線引きさえしっかりすれば、その時代のライフスタイルになった日本古来の人生行事を自信を持って提示できます」と語っています。居木神社が目指す「新しい温故知新」の価値は、大崎の人々にとっての新しい文化遺産ともいえます。



居木神社・森田 宮司